

多摩セクション

# 東京マガジンバンクカレッジ

2017.8  
第2号

多摩を歩く、江戸から東京へ散歩、

夏



東京都立多摩図書館

## 『東京マガジンバンクカレッジ』第2号の刊行にあたって

『東京マガジンバンクカレッジ』第2号は、多摩セクションのイベント「多摩を歩く～江戸から東京へ散歩～夏」(平成29年6月25日実施)にご参加いただいた皆様から原稿をいただき、作り上げた雑誌です。

「多摩を歩く～江戸から東京へ散歩～夏」は東京マガジンバンクカレッジ多摩セクションの講演会「江戸から東京へー多摩万華鏡ー」(平成29年5月28日実施)に参加された方が、講演で紹介された場所を実際に歩いて、学んだ知識を体感したイベントです。しかし、それだけではありません。現地を感じ、体験したことを写真や文章で綴り、さらに何人かの方には編集作業にもご協力いただいて1冊の雑誌にまとめました。

今回の散歩は、主に明治の産業遺産を訪ねるもので訪れた地域も限られておりますが、参加者の皆様と一緒に、多摩の歴史の奥深さと散歩の楽しさを味わうお気持ちでお読みいただきたいと思います。

### 表紙の解説

橋脚に日野煉瓦が使用された多摩川橋梁。現存する数少ない日野煉瓦製構造物です。JR中央線の前身である甲武鉄道の時代から使われています。

## 目次

■ 講師紹介	2
■ 当日の行程	3
■ 当日の地図	4
■ 絹の道	8
■ 旧多摩聖蹟記念館	16
■ 日野宿本陣	18
■ 日野煉瓦遺構	20
■ もっと詳しく知りたいときは	24
■ 「東京マガジンバンクカレッジ」案内	26
■ 執筆者一覧	27
■ 編集後記	28

多摩を歩く  
 ～江戸から東京へ散歩～  
 講師



せん だ      なお と  
 仙田 直人 氏

品川女子学院高等部校長  
 (前東京都立三鷹中等教育学校校長)

主な著作  
 『東京グローバル散歩』  
 (共著、山川出版社 2016)

『東京多摩散歩 25 コース』  
 (山川出版社 2004)

当日の行程 平成29年6月25日(日)



8:45 京王相模原線 南大沢駅 集合



絹の道資料館



絹の道  
 道了堂跡



旧多摩聖蹟記念館

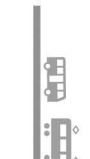


桜ヶ丘公園 (昼食)

AM



旧蚕糸試験場日野桑園  
 日野第一中学校  
 日野宿問屋場跡



日野宿本陣 (天然理心流道場跡)  
 飯綱権現 (煉瓦遺構)  
 日野用水堰 (煉瓦遺構)



多摩川橋梁 (煉瓦遺構)

17:30 立川駅 解散



PM

# 午前 MAP



# 午後MAP



# 絹の道

絹の道資料館  
道了堂跡



雨も上がり陽が差す絹の道



## 絹の道



「絹の道」は、「浜街道」とも呼ばれる神奈川往還の通称です。日米修好通商条約による横浜開港後に生糸が重要な輸出品となることを知った八王子の鑓水商人たちはこの道を通って横浜に生糸を運び、外国を相手に商売を展開しました。

現在残っているのは絹の道資料館から道了堂までの約1.5kmのみですが、絹の道資料館は巨利を得た鑓水商人八木下要右衛門の屋敷跡であり、往時を偲ぶ見事な石垣があります。(事務局)

京王相模原線の南大沢駅より橋本駅行きのバスに乗車、「鑓水中央」で下車しました。乗車時間は、およそ7分です。生糸商人、八木下要右衛門の屋敷跡に建てられた「絹の道資料館」では、養蚕に関する基礎知識を学ぶことができ鑓水商人の財宝を知ることができます。庭には、土蔵や排水溝の跡などが整備されております。歩いた「絹の道」は、八王子に集積された生糸を横浜まで馬の鞍に乗せ運んだ道です。資料館には鞍の実物が展示されておりますが、大きく重そうなものでした。馬はその鞍に生糸を沢山背負ってこの道をどのような気持ちで歩んだのであろうかと考えながら、「道了堂跡」までの約1.5kmを歩きました。緩やかな勾配であり、適度な汗をかき気持ちの良い散策ができました。

有田 禮二



以前、横浜で氷川丸の見学をした時に、その船内で、「氷川丸は、生糸も運んでいました」の展示にであったことがありました。自分自身、生糸の里のゆかりの地で生育したこともあり、蚕に関する事柄には、思いきりの関心が高まります。「絹の道」も、是非とも訪ねてみたいと思っていました。今回、「絹の道資料館」で、国を富ませた人々の生活の様子を知り、実際に「絹の道」を歩く体験をしてみて、あらためて、大きな時代の流れと、その中にかかわった人々の思いにふれることができました。おおいに栄えた道が、今では静けさにみちた所になっているのが、しみじみと、歴史の重みや、人が生きることのきびしさを感じさせてくれる、不思議な異空間のようでした。

池田 雅子

朝、家を出た時はまだ雨が降っていて、駅まで歩く間にけっこう濡れました。でも、南大沢駅に着く頃には上がっていて幸先良いスタート。

バスで移動し、まずは絹の道資料館を目指します。小ぢんまりした資料館ですが、絹関連の資料だけでなく、当時の様子を表す地図や絵画、栄華がしのばれるお寺の欄間彫刻など見るべきものがいっぱい。

その後、途中までは舗装路、途中からは砂利道になる昔ながらの絹の道を歩きました。道の狭さが当時を偲ばせ、背に絹糸や蚕紙を積んだ馬がここを歩いたんだなあ感慨にふけりました。

資料館で時間が足りず、もっとゆっくり見たかったので、また訪ねたいと思います。

I.Y



皆さん真剣！（絹の道資料館）

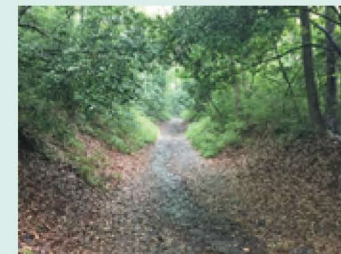
八王子はかつて桑都と呼ばれ、養蚕や織物の盛んな地域だった。そしてまた長野、山梨県などから横浜に生糸を運ぶための「絹の道」があった。現在整備保存されているその絹の道の近くに、「絹の道資料館」はある。鑑水の生糸商、八木下要右衛門の屋敷跡に、養蚕や生糸商人に関する資料を展示する為に建設されたものである。

ドイツの考古学者シュリーマンは「日本中国旅行記」に、横浜から町田を経由して、八王子に馬で旅行したことを書いている。慶応元年（1865年）のことである。家々にはたいてい手動式の生糸紡績器（座繰器）があるなどと書かれているが、シュリーマンは日本の生糸にとっても興味を持っていたようだ。

その5年後シュリーマンは1870年から3年間かけてトロイを発掘した。日本では明治5年（1872年）に、官営富岡製糸場が操業を始めたが、「絹の道資料館」の資料を眺めながら、当時の時間の大きな流れを感じることができた。

上岡 和江

確かにシルクロードが東京にもあった。八王子市鑑水にある絹の道資料館を北西に約100m進み、分かれ道を右に入ると、そこが鑑水商人達が横浜方面に生糸を運んだ絹の道の入口だ。木々のトンネルを登りながら進むと一瞬にして空気が変わる。大塚山公園までの約1km緩やかな上り坂が続くが、人とすれ違う事は稀だ。そこはまるで昔にタイムスリップしたような世界。彼らは何を考えながらこの坂道を登っていたのだろう。その静けさの中で、背中に生糸を背負った馬の鼻息や鑑水商人達の会話に思いを馳せる。鑑水峠を越えた小高い丘からは、当時光り輝いて見えただであろう素晴らしい眺望が眼下に広がっていた。



ケンケン

この度の、仙田直人先生のガイドで歩いた「明治日本の近代国家への歩みを体感する」ツアーは、どのテーマも興味深いものばかりでした。

日本のシルクロード「絹の道」を歩く、では日米修好通商条約締結で開港された横浜と、生糸の集積地であった八王子を結ぶ為の道、この道を使い生糸を横浜に運んだ八王子の鑑水商人のお話をいただきましたが、横浜開港によって、江戸の大商人ではない八王子の在郷商人がダイレクトに貿易を行おうとしたことに、非常にロマンを感じました。

「絹の道」といえば、武帝の命を受け前139年西域へ向かった張騫でしょうが、今、習近平政権は「シルクロード経済ベルト構想」を提唱しています。

絹の道、シルクロードと聞くと、物騒がしい気分になるのは私だけなのでしょうか。

また、ここの絹の道には道了堂のお婆さんの話もあり、そうでなくても未舗装の緑多い涼しげな道を一層涼くさせます。

「絹の道」にはロマンの風が吹いています。

もぐら



この先は絹の道

鑑水生糸商人と西洋の文化人・商人との交流地八王子市。横浜からここまで商用、観光で来訪していたとは驚きであった。絹の道の人々の逞しさを短い距離ながら味わえた。鑑水の松が江川太郎左衛門により台場5.6番の材料に使われたのも興味深い。

C.S

幕末の多摩の「絹の道」を巡る一日は、日本の歴史を身近に感じた貴重な時だった。

狭い坂道、雨に濡れた木々はうっそうとし、半ば埋もれた石の道を踏みしめながら歩く、気分はすっかり幕末。思えば、私は信州佐久の農家の生まれで養蚕もしていた。夏休みの「桑とり」の手伝い、「おかいこあげ」となると、新盆中であっても、お構いなし。「おかいこさま」と言われる所以である。先代が昼夜問わず蚕を育て繭にして出荷していた先にこの道があったのだ、感無量。

歩いてきたこの道も、鉄道の開通と共に、50年間の歳月を経て消えていく。

「絹の道」鑑水商人達の盛衰に思いを馳せて道は大塚山公園へと出た。

土屋 憲一

“石垣大尽”とよばれた八木下邸跡・絹の道資料館・道標(資料館手前ですが)・庚申塔等を見ながら大塚山公園入口まで木々の間を通る絹の道は、足元のやわらかな土を踏みしめながら、森林浴(?)も兼ねて歩くすばらしい道、ずっと残したい道です。今回は行かなかった(と思いますが…)養蚕農家の小泉家・鑑水商人の墓があり、八木下邸を移築した永泉寺・商人寄進の石灯籠がある諏訪神社も合わせて回って、日本のシルクロードを見直そう!

A.Y



多摩シルクロードの入り口





## 道了堂跡

6月25日の「地域散歩」でいちばん印象に残った場所は、八王子市の鑑水でした。百聞は一見に如かずということばがありますが、まさにそのことを実感しました。

絹の道資料館で仙田先生からお話をいただいたあと、みんなで絹の道を歩きました。山道を登りつめたら、鑑水峠(道了堂跡)にでました。峠から眼下に八王子の市街が見えます。“そうだったのか、鑑水は鑑水峠の麓につくられた峠の集落だったのか”と感じました。

絹の道が盛んだったころ、鑑水は、馬籠峠と馬籠宿の関係に似て、横浜から八王子へ帰る商人や運送業者が小休止をする場所だったのではないのでしょうか。こうした人々は、小休止の合間に、横浜での生糸ビジネスのようすを鑑水に伝えたことでしょう。その情報を入手した八木下要右衛門のような人がみずから生糸ビジネスに参入し、商才を発揮して財力を形成したのではなかったでしょうか。

バス道から見ただけでは、鑑水が峠の集落だとは気づくことはありません。自分の足で峠道を歩いてそうした仮説をもっただけです。鑑水はほんとうに峠の集落なのだろうか、浜街道(絹の道)には他にも峠の集落が多くあったはずなのになぜ鑑水だけが栄えたのだろうか、そうした疑問が生まれました。このたびのツアーで、これからの楽しみをつくっていただいた気持ちになっています。

プーオジサン



絹の道に向かう

道了堂は明治初年、生糸の商いで繁栄した鑑水商人と生糸商人によって建てられた永泉寺別院です。鑑水地域の振興の拠点として賑わいました。鑑水商人の没落と共に衰退し、昭和38(1963)年に廃寺となり、本堂も壊れ、昭和58(1983)年には解体されます。その後八王子市が史跡公園として整備します。本堂跡には礎石が残され当時の位置を示しています。園内には、石段、石碑、石灯籠があり、道了堂の石碑もあり必見です。堂守が亡くなり、廃屋になってからは絹の道の整備で大塚山公園となります。(土屋 憲一)

往時を偲ばせる絹の道を通り石段を上ると道了堂跡地があった。今から4、50年前、新聞に“道了堂のたたり”というテーマで3人の男性が真夜中の道了堂へきもだめしに行き、後に3人とも死亡したとあった。幕末から明治にかけて鑑水商人が利用した絹の道の周辺には、商人の変死、道了堂の老婆の殺害、大学助教授の教え子殺しなど血なまぐさい事件などがあった。

今でも“行っってはいけない”心霊スポット”として、真夜中に道了堂へ行った人が、後方からヒタヒタとついてくる足音を聞いたという事で話題になっている。

「呪われたシルクロード」(辺見じゅん著)を再読してもう一度行きたい場所である。

柏木 三夫



# 旧多摩聖蹟記念館



## 旧多摩聖蹟記念館

旧多摩聖蹟記念館は、明治天皇が兎狩りと鮎漁で4回ほど訪れた記念に多摩聖蹟記念館として建設されました。老朽化により取り壊しも検討されましたが、昭和初期の近代建築として高い評価を受けており、昭和61年(1986)に多摩市指定有形文化財に指定されました。行幸の記念碑から、都立桜ヶ丘公園を訪れた人々の憩いの場として生まれ変わり、「旧」多摩聖蹟記念館となりました。(事務局)

自然豊かな都立桜ヶ丘公園内に明治天皇を顕彰する記念館があります。この記念館は明治天皇が兎狩りや鮎漁で行幸されたことを記念し、昭和5年(1930)に建設されました。館内中央には明治天皇30歳時の騎馬像や元・宮内大臣の田中光顕が収集した坂本龍馬の肖像画など多くの書画が常設展示されています。ここで感動したことは、館長さんの特別のはからいで隣接の「五賢堂」を見学することができたことです。明治天皇立像と5賢人の胸像が置かれた祠です。大磯の吉田茂邸の七賢堂は肖像写真ですがここはブロンズ像。三条、岩倉、大久保、木戸と西郷。

吉田茂の推挙により伊藤博文ではなく西郷になったようで西郷ファンは必見！上野の西郷さんとは顔が違う。

松崎 克彦



# 日野宿本陣



## 日野宿本陣

JR中央線日野駅下車、甲州街道を10分余り歩くと日野宿本陣があります。都内で唯一残る江戸時代の本陣遺構。江戸と日野は約十里、40キロあり、当時の成人男子の一日の行程でした。

幕末の英雄、新選組副長土方歳三が昼寝を楽しんだ部屋が残り、幕末の残り香が幽かに匂う日野宿本陣。訪ねてみませんか。（広瀬 秋良）

「本陣」「脇本陣」と言えば、誰もが耳にした言葉だ。唯、年輪と共に記憶が薄れ「確か江戸時代の宿だよな」くらいで、下手をすると「そもそも何だっけ？」となる。そんな記憶を呼び戻してくれるのがこの「甲州街道日野宿本陣」。都内で唯一の「本陣」で、それだけで一見の価値ありだが、ここは新選組で名を馳せた土方歳三が出入りしていた屋敷でもあるのだ。

場所は当時の日野の中心、近くには、甲州街道を挟み、問屋場・高札所跡がある。

早速、門をくぐると由緒ある古民家の佇まい。庭を抜け、向かって左の勝手口から入る。土間が広がり、奥に座敷が連なる。座敷へとあがる。そこは、まさに昔懐かしい田舎のおばあちゃんの家そのもの。更に進む。部屋を抜け左に折れると上座がある。上座からは裏庭が眺められ、ここで休息、宿泊したであろう往時の大名と時を超え空間を共有することができる。

最近までお蕎麦屋さんとして営業していたが、極力元の材料と構造物と建具を生かして修理を行うなど、後世に残すべく保存していたという、時代を紡いできた必見スポットである。

伴 勝宏



# 日野煉瓦遺構



日野第一中学校  
飯綱権現  
日野用水堰  
多摩川橋梁



## 日野煉瓦遺構

明治時代に日野で作られた煉瓦が、120年以上経った今でも現役で頑張っています。その代表例が、JR中央線「多摩川橋梁」の上り線の橋脚で、明治20年(1887)設立の「日野煉瓦」製の煉瓦が20万個使われています。日野煉瓦の操業時期はわずか2年半、総生産数50万個で、縦横寸法が現在のJISより8ミリ大きいのが特徴です。(松崎 克彦)

多摩セクション地域散歩は、図書館での講演で興味深い話を聞いた後、その場を訪ねたことにより、更に印象深く学ぶことができたイベントであった。

部分的ではあるが、当時の状態が残っている絹の道は、馬の背に荷を乗せ往来している様子を想像し、その当時にタイムスリップできた。これは、実物で学ぶ素晴らしい学習法ではないだろうか。

今回最も感動を受けたのは、最後に訪ねた甲武鉄道の日野レンガで支えられた橋梁であった。

耐震の為コンクリートで覆われる橋脚が、地元民の声によって一か所だけそのままの姿で残されていた。ゾウの足のような逞しいその姿形は、130年前の日本の技術を伝える文化遺産そのものであり、その当時の技術の素晴らしさに感動した。

図書館には多くの蔵書があるが、そこに記されたものに直接触れるという、このような企画は、新しい学び舎として是非続けていただきたく思う。

河西 公子



日野レンガ(HBW)はお洒落なロゴである。日野一中のもいいが、多摩川鉄橋のそれは心地良い川風を感じながら、行き交うJR電車の音を聴いていると125年の悠久の時を感じる嬉しい異空間であった。  
C.S

1889(明治22)年、甲武鉄道立川～八王子間開業のために建設された多摩川橋梁。そこに唯一当時の姿のまま残されている煉瓦の橋脚。多摩川沿いの土手を下り、辿り着いて間近で見た、煉瓦の構造物としての力強さと、曲面の造形美。そして下から見上げた、中央線の電車が渡っていく姿。約130年前の光景に思いを馳せることが出来ました。使用された煉瓦は、日野宿の有力者らによって設立された「日野煉瓦工場」で製造されたもので、日野煉瓦が使用された構造物等は、他にも日野市内を中心に複数残されており、地域の見所の一つとなっています。旧蚕糸試験場日野桑園の第一蚕室と合わせ、多摩の近代化遺産として、ぜひ足を運んでいただきたいと思います。

田中 和夫



神社の土台に煉瓦



大学を卒業し就職した会社は炭鉱で、今は無い石炭産業である。近年、不思議なことにこの石炭産業の廃墟が産業遺産として脚光を浴びつつある。長崎県の軍艦島は世界遺産に登録された。

さて日野レンガである。日野煉瓦設立の目的は甲武鉄道の多摩川鉄橋建設にあった、という。甲武鉄道の立川～八王子間の開通は明治22年。しかし日野煉瓦は創業者の急死により、明治23年には廃業となり、わずか2年半の短命に終わった。一方、ほぼ同時代、北海道江別のレンガは開拓使の奨励もあり、鉄道、港湾施設、北海道庁、ビール工場、土管など多岐に亘り、現在もセラミック製品としてのレンガの生産は有力産業として維持されている。この差異は何故か？日野煉瓦の痕跡はこれのみか、または未発見の埋もれたレンガはないのか？

興味は尽きない。

広瀬 秋良

日野と立川の間の多摩川を渡る中央線上りの鉄橋には、明治22年(1889年)に開通した甲武鉄道の当時の橋脚が今も使われている。橋脚には日野で作られた煉瓦20万個が使われたといわれ、多くは補強されているが、1本だけ当時のままの姿を見ることが出来る。120年以上もの長きに渡り、鉄道の往來を支え、今もなお支え続けている煉瓦の橋脚は風格があり、歴史に思いをはせる一見の価値がある貴重な存在だ。

K.T



## もっと詳しく知りたいときは

東京マガジンバンクには、多摩地域の人々の暮らし、文化、歴史等を扱った様々な地域情報誌があります。講演会「江戸から東京へー多摩万華鏡ー」では会場の一角にこれらの地域情報誌を展示してご覧いただきました。

また、専門的な雑誌に多摩地域に関する記事が掲載されることもあります。ここでは、今回の散歩で訪れた「絹の道」と「煉瓦遺構」に関する記事のうちいくつかをご紹介します。

是非ご来館いただき、豊かな雑誌の世界をお楽しみ下さい。



『多摩のあゆみ』 55号 (たましん地域文化財団 1989.5)

### 「特集 多摩の道探訪」

西川武臣著 「横浜開港と「武州糸」-「絹の道」の数量的検討-」 p.53-65

かつて八王子から海を渡って海外に広まっていった八王子の生糸。それがどのようなルートで横浜まで運ばれたのか、他地域と比べてどんな評価で取引されていたのかなどが詳細な資料から明らかになっています。これを読めば八王子から海へと続いた「絹の道」をじっくりとたどることができます。



『多摩のあゆみ』 159号 (たましん地域文化財団 2015.8)

### 「特集 多摩のレンガ」

高橋秀之著 「甲州街道のレンガ歩道」 p.16-21

建物に使われることがほとんどの煉瓦ですが、甲州街道に使われていたことはご存じない方も多いのではないのでしょうか。しかもその煉瓦は八王子工場の最後の煉瓦だったかもしれないとか。記事の写真には今回訪れた日野第一中学校の煉瓦モニュメントの写真も掲載されています。何気なく歩いている甲州街道を新しい気分で見つめられること間違いなしです。



『多摩文化』 第4号 (多摩文化研究会 1960.4)

柴胡庵著 「蚕糸業の八王子」 p.39-43

松岡喬一著 「多摩産業盛衰記-長沼の煉瓦場-」 p.44-47

『多摩文化』は、八王子及び多摩地域の地方文化に関心をもつ市井の郷土史家を会員とする「多摩文化研究会」の機関誌として昭和34(1959)年に創刊されました。

ご紹介するのは、その第4号に掲載された記事です。鎌水村の生糸商大塚五郎吉家の広範な活動の記述から桑都八王子の賑わいが目に浮かびます。また、長沼の煉瓦工場の記事には昭和6、7年ごろの写真が添えられ、煉瓦師の賃金や原料の粘土採取の苦勞なども書かれています。ページが茶色く変色した半世紀前の雑誌ですが、往時を偲びながら読む気分は格別なのではないでしょうか。

『考古学ジャーナル』 664号 (ニューサイエンス社 2014.12)

### 「特集 煉瓦にみる東京の近代史」

大石絵里子著 「鉄道と煉瓦 - 日野煉瓦にみる近代史 - 」 p.7-11

日野煉瓦はJR中央線の前身である甲武鉄道の建設資材として供給された煉瓦です。この記事では煉瓦製造に関わった人々に触れながら、日野煉瓦誕生の経緯が解説されています。また、甲武鉄道当時に建てられ、現存している日野煉瓦構造物等も紹介されており、地域散歩で訪れた多摩川橋梁、飯綱権現等も掲載されています。

なお、この号では日野煉瓦の成形や八王子煉瓦の記事も収録されています。各記事の参考資料・文献等も併せて参照すると、より深く煉瓦について学ぶことができます。

# 「東京マガジンバンクカレッジ」 案内

東京都立多摩図書館は、「雑誌と児童・青少年資料の図書館」として、平成29年1月29日に国分寺市に移転オープンしました。

雑誌については、公立図書館として国内最大規模の約17,000タイトルを擁し、雑誌の特性を活かした様々なサービスを行っています。

移転を機に、雑誌をより一層活用していただくため、「東京マガジンバンクカレッジ」を開設いたしました。



都立多摩図書館外観



雑誌エリア

「東京マガジンバンクカレッジ」は「雑誌の魅力を知る・創る・伝える」をコンセプトとして、「雑誌総合」「多摩」「鉄道」の3セクションがそれぞれ又は合同で講演会、セミナー等を継続的に行い、雑誌を仲立ちとする学びと交流の場を創出することを目指しています。

「多摩セクション」では今年度最初の事業として、5月28日(日)に講演会「江戸から東

京へー多摩万華鏡ー」を開催しました。この雑誌は講演会及びそれに続く地域散歩に参加された方の原稿をまとめたものです。このように東京マガジンバンクカレッジでは様々な形で皆様にご参加いただき、楽しみながら関心や知識を深めていただくことを目指しています。

「東京マガジンバンクカレッジ」のイベントの予定は、広報紙、都立図書館ホームページ等に掲載するほか、チラシを区市町村立図書館にお配りしてお知らせします。これからも「東京マガジンバンクカレッジ」にご注目いただき、是非ご参加くださいますようお願いいたします。



講演会「江戸から東京へ」

## 執筆者一覧



有田 禮二	田中 和夫
池田 雅子	土屋 憲一
I.Y	伴 勝宏
河西 公子	広瀬 秋良
柏木 三夫	ブーオジサン
上岡 和江	松崎 克彦
ケンケン	K.T
もぐら	A.Y
C.S	

## 編集後記

今回の散歩に参加された方の記事はいかがでしたか。日常生活の中で見落としてしまうような場所にも産業遺産が眠っていたなんて、心が躍りますね。本誌を通じて、多摩地域の殖産興業の歴史を垣間見ていただくことができれば幸いです。

講演会及び散歩の計画から案内までお務めくださった仙田先生に、心より御礼申し上げます。そして、講演会にご参加の皆様、今回の散歩に参加し原稿をお書きくださった皆様、お忙しい中編集作業にご協力くださった皆様、全ての方に御礼申し上げます。

次回は『東京マガジンバンクカレッジ』第3号「多摩を歩く～江戸から東京へ散歩～秋」でお会いしましょう。

東京マガジンバンクカレッジ 第2号

平成29年8月発行

編集 東京マガジンバンクカレッジ事務局

発行 東京都立多摩図書館

〒185-8520 東京都国分寺市泉町二丁目2番26号

電話 042-359-4020

ホームページ <http://www.library.metro.tokyo.jp/>





東京都立多摩図書館

